

Definition 0.0.1

基点つき空間 X に対し、

$$h : \pi_n(X) \longrightarrow \tilde{H}_n(X)$$

を次のように定義する。 $[f] \in \pi_n(X)$ に対し、

$$f : S^n \longrightarrow X$$

であるため、 $f_* : \tilde{H}_n(S^n) \longrightarrow \tilde{H}_n(X)$ を考えれば、次元定理と懸垂定理から、 $\tilde{H}_n(S^n) \cong \mathbb{Z}$ なので、この生成元を i_n とおくと、 $h[f] = f_*(i_n)$ と定義する。これは後に示していくように well-defined で natural な準同型になるため、 h を Hurewicz 準同型と呼ぶ。

Lemma 0.0.2

h : well-defined

proof) $[f], [g] \in \pi_n(X)$ に対し、 $f \simeq g$ とすると、

$$f_* = g_* : \tilde{H}_n(S^n) \longrightarrow \tilde{H}_n(X)$$

であるので、 $h[f] = f_*(i_n) = g_*(i_n) = h[g]$

Lemma 0.0.3

h は準同型である。

proof) $[f], [g] \in \pi_n(X)$ に対し、 $\pi_n(X)$ での積は、

$$S^n \xrightarrow{p} S^n \vee S^n \xrightarrow{f \vee g} X \vee X \xrightarrow{\Gamma} X$$

の合成が代表元である。ここで p は pinch 写像、 Γ は fold 写像である。ここで、

$$q_i : S^n \vee S^n \longrightarrow S^n$$

は $i = 1, 2$ に対し、前方・後方の S^n を潰す projection である。

$$\begin{array}{ccc} S^n & \xrightarrow{p} & S^n \vee S^n \\ \downarrow = & & \downarrow q_i \\ S^n & \xrightarrow{=} & S^n \end{array}$$

の図式を考えると、 p, q_i を合成したものは S^n の下半分、上半分を潰す projection であるので、北極点、南極点に向かって cover していくことを考えれば図式は homotopy 可換である。これより、

$$q : \tilde{H}_n(S^n \vee S^n) \longrightarrow \tilde{H}_n(S^n) \oplus \tilde{H}_n(S^n)$$

を、 $q(x) = (q_{1*}(x), q_{2*}(x))$ で定義すると、

$$\begin{array}{ccc} \tilde{H}_n(S^n) & \xrightarrow{p} & \tilde{H}_n(S^n \vee S^n) \\ \downarrow = & & \downarrow q \\ \tilde{H}_n(S^n) & \xrightarrow{\text{copy}} & \tilde{H}_n(S^n) \oplus \tilde{H}_n(S^n) \end{array}$$

が可換となる。 q は加法性定理の同型の逆写像であることがわかるので、

$$\begin{array}{ccc} \tilde{H}_n(S^n) & \xrightarrow{\text{copy}} & \tilde{H}_n(S^n) \oplus \tilde{H}_n(S^n) \\ \downarrow = & & \downarrow i_{1*} + i_{2*} \\ \tilde{H}_n(S^n) & \xrightarrow{p_*} & \tilde{H}_n(S^n \vee S^n) \end{array}$$

が可換である。これを踏まえれば、次の図式が可換であることもわかる。

$$\begin{array}{ccccccc} \tilde{H}_n(S^n) & \xrightarrow{\text{copy}} & \tilde{H}_n(S^n) \oplus \tilde{H}_n(S^n) & \xrightarrow{f_* \oplus g_*} & \tilde{H}_n(X) \oplus \tilde{H}_n(X) & \xrightarrow{+} & \tilde{H}_n(X) \\ \downarrow = & & \downarrow i_{1*} + i_{2*} & & \downarrow i_{1*} + i_{2*} & & \downarrow = \\ \tilde{H}_n(S^n) & \xrightarrow{p_*} & \tilde{H}_n(S^n \vee S^n) & \xrightarrow{f \vee g_*} & \tilde{H}_n(X \vee X) & \xrightarrow{\Gamma_*} & \tilde{H}_n(X) \end{array}$$

これにより、

$$h([f] + [g]) = (f + g)_*(i_n) = f_*(i_n) + g_*(i_n) = h[f] + h[g]$$

Lemma 0.0.4

h は natural である。つまり、基点を保つ写像 $\alpha : X \rightarrow Y$ に対し、次の図式が可換となる。

$$\begin{array}{ccc} \pi_n(X) & \xrightarrow{h} & \tilde{H}_n(X) \\ \alpha_* \downarrow & & \downarrow \alpha_* \\ \pi_n(Y) & \xrightarrow{h} & \tilde{H}_n(Y) \end{array}$$

proof) ほぼ関手の定義から明らかである。 $[f] \in \pi_n(X)$ に対し、

$$h \circ \alpha_*[f] = h[\alpha \circ f] = (\alpha \circ f)_*(i_n) = \alpha_* \circ f_*(i_n) = \alpha_* \circ h[f]$$

Lemma 0.0.5

h は suspension と可換である。つまり、

$$\begin{array}{ccc} \pi_n(X) & \xrightarrow{h} & \tilde{H}_n(X) \\ \Sigma \downarrow & & \downarrow \Sigma \\ \pi_{n+1}(\Sigma X) & \xrightarrow{h} & \tilde{H}_{n+1}(\Sigma X) \end{array}$$

は可換である。

proof) $[f] \in \pi_n(X)$ に対し、 $i_n \in \tilde{H}_n(S^n)$ は生成元で、

$$\Sigma : \tilde{H}_n(S^n) \rightarrow \tilde{H}_{n+1}(S^{n+1})$$

の同型により、 $\Sigma i_n = i_{n+1}$ であるため、

$$\Sigma \circ h[f] = \Sigma \circ f_*(i_n) = (\Sigma f)_* \circ \Sigma(i_n) = (\Sigma f)_*(i_{n+1}) = h[\Sigma f] = h \circ \Sigma[f]$$

続いて Hurewicz 準同型が同型になる状況を考えてみよう。

Lemma 0.0.6

A, B : アーベル群 , $A \cong B \cong \mathbf{Z}$, $f : A \rightarrow B$ hom に対し、

i_A, i_B を、 A, B の生成元とする。このとき、 $f(i_A) = i_B \implies f : \text{同型}$

proof) まず全射を示す。 $\forall b \in B$ に対し、 $\exists n \in \mathbf{Z}$ s.t. $b = n \cdot i_B$ なので、

$$a = n \cdot i_A \in A \text{ に対し、} f(a) = f(n \cdot i_A) = n \cdot f(i_A) = n \cdot i_B = b$$

次に単射を示す。 $a \in A$ に対し、 $f(a) = 0$ とする。

$$\exists n \in \mathbf{Z} \text{ s.t. } a = n \cdot i_A$$

なので、 $f(a) = f(n \cdot i_A) = n \cdot f(i_A) = n \cdot i_B = 0$ より、 $n = 0 \therefore a = 0$

この証明で重要なのは、アーベル群が 1 元生成だからである。

Theorem 0.0.7

$X = S^n$ の時、

$$h : \pi_n(X) \rightarrow \tilde{H}_n(X)$$

は同型である。

proof) $[1_{S^n}] \in \pi_n(S^n)$ は生成元であり、その行き先は、

$$h[1_{S^n}] = (1_{S^n})_*(i_n) = i_n$$

であり、生成元が生成元に移っているので、Lemma 0.0.6 より、同型である。

Proposition 0.0.8

$n \geq 2$ のとき、

$$\sum i_{\lambda*} : \bigoplus_{\lambda \in \Lambda} \pi_n(S^n) \rightarrow \pi_n\left(\bigvee_{\lambda \in \Lambda} S^n_{\lambda}\right)$$

は同型である。

proof) まず S^n が 2 個の場合を考えよう。

S^n の基点を e_0 とすると、 $S^n = e_n \cup e_0$ で CW complex であった。

$$\text{よって、} S^n \times S^n = (e_n \times e_n) \cup (e_n \times e_0) \cup (e_0 \times e_n) \cup (e_0 \times e_0)$$

の分割で $S^n \times S^n$ は CW complex である。胞体の数は 4 つ。次元は $2n$ である。

詳しく言うと、 $2n$ -cell が 1 つ、 n -cell が 2 つ、 0 -cell が 1 つである。

これより、 $n \leq m \leq 2n - 1$ に対し、

$$S^n \times S^n \text{ の } m\text{-skelton} = S^n \times e_0 \cup e_0 \times S^n = S^n \vee S^n$$

ここで、対空間のホモトピー群の完全列を思い出すと、

$$\pi_{n+1}(S^n \times S^n, S^n \vee S^n) \longrightarrow \pi_n(S^n \vee S^n) \longrightarrow \pi_n(S^n \times S^n) \longrightarrow \pi_n(S^n \times S^n, S^n \vee S^n)$$

が完全列であり、 $n \geq 2$ に対し、 $2n - 1 \geq n + 1$ なので、胞体近似定理より、

$$f : (D^{n+1}, S^n) \longrightarrow (S^n \times S^n, S^n \vee S^n) \text{ は、}$$

D^{n+1} が $(n + 1)$ 次元の CW complex だから、

$$\exists g : (D^{n+1}, S^n) \longrightarrow (S^n \times S^n, S^n \vee S^n) \quad \text{s.t.} \quad g(D^{n+1}) \subset S^n \vee S^n, \quad g \simeq f$$

$$\therefore \pi_{n+1}(S^n \times S^n, S^n \vee S^n) = \pi_n(S^n \times S^n, S^n \vee S^n) = 0$$

これより、 $j : S^n \vee S^n \longrightarrow S^n \times S^n$ inclusion により、

$$j_* : \pi_n(S^n \vee S^n) \longrightarrow \pi_n(S^n \times S^n) : \text{同型}$$

$$\text{また、} p : \pi_n(S^n \times S^n) \longrightarrow \pi_n(S^n) \times \pi_n(S^n) = \pi_n(S^n) \oplus \pi_n(S^n)$$

の同型があったことを思い出すと、

$$\begin{array}{ccc} \pi_n(S^n) \oplus \pi_n(S^n) & \xrightarrow{i_* + i_*} & \pi_n(S^n \vee S^n) \\ & \searrow p & \swarrow i_* \\ & \pi_n(S^n \times S^n) & \end{array}$$

が可換になっている。よって、

$$i_* + i_* : \pi_n(S^n) \bigoplus \pi_n(S^n) \longrightarrow \pi_n(S^n \vee S^n) \quad \text{同型}$$

これより、有限個の S^n の wedge に対しても同様のことが言える。ただこのままの議論を無限個に拡張できないのは、無限個の直積空間が CW かどうかが定かでないからである。しかし、今の場合、

$$[f] \in \pi_n(\bigvee S_\lambda^n) \quad \text{とすると、} \quad f : S^n \longrightarrow \bigvee S_\lambda^n \quad \text{であるが、}$$

ここで、定義域の S^n が compact なので、 $\exists \lambda_1, \dots, \lambda_k \in \Lambda$ s.t

$$f(S^n) \subset \bigvee_{i=1}^k S_{\lambda_i}^n$$

となり、有限の議論ができるわけである。

Proposition 0.0.9

$n \geq 2$ 、 $X = \bigvee_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda^n$ の時、

$$h : \pi_n(X) \longrightarrow \tilde{H}_n(X)$$

は同型である。

proof) 下の図式が可換なので、明らか。

$$\begin{array}{ccc} \bigoplus \pi_n(S^n) & \xrightarrow{\oplus h} & \bigoplus \tilde{H}_n(S^n) \\ \cong \downarrow & & \downarrow \cong \\ \pi_n(\bigvee S^n) & \xrightarrow{h} & \tilde{H}_n(\bigvee S^n) \end{array}$$

Lemma 0.0.10

X を CW 複体とし、 $i : X^{(n+1)} \longrightarrow X$ を inclusion とすると、

$$i_* : \pi_n(X^{(n+1)}) \longrightarrow \pi_n(X)$$

は同型である。

proof) $(X^{(n+2)}, X^{(n+1)})$ は $n+1$ 連結であるので、homotopy 完全列により、

$$i_{n+1*} : \pi_n(X^{(n+1)}) \longrightarrow \pi_n(X^{(n+2)})$$

は同型であるため、この構成を繰り返すことで、

$$\pi_n(X^{(n+1)}) \cong \pi_n(X^{(n+2)}) \cong \pi_n(X^{(n+3)}) \cong \dots$$

であるため、

$$i_* : \pi_n(X^{(n+1)}) \longrightarrow \pi_n(X)$$

が同型となる。

Theorem 0.0.11 Hurewicz 定理

X が $n-1$ 連結であるとき、

$$h : \pi_n(X) \longrightarrow \tilde{H}_n(X)$$

は同型である。

proof) 任意の位相空間は CW 複体の弱ホモトピー型を持つため、 X は CW 複体と仮定して問題ない。また、次の可換図式

$$\begin{array}{ccc} \pi_n(X^{(n+1)}) & \xrightarrow{h} & \tilde{H}_n(X^{(n+1)}) \\ \downarrow i_* & & \downarrow i_* \\ \pi_n(X) & \xrightarrow{h} & \tilde{H}_n(X) \end{array}$$

において、縦列は Lemma 0.0.10 と cellular chain のホモロジーから双方とも同型である。よって、 $n+1$ -skelton 上での Hurewicz 準同型が同型になること示せばよい。ところで $n-1$ 連結ということは、0-cell が 1 つで、 $1 \leq k \leq n-1$ において k -cell は存在しない。よって、 n -skelton は $\vee S^n$ であり、 $n+1$ -skelton は $\vee S^n$ に $\coprod D^{n+1}$ を特性写像により境界で貼り付けた空間である。 $D^{n+1} \cong CS^n$ であるため、 $X^{(n+1)}$ は、 $n+1$ 次元の特性写像から定義される、

$$\varphi : \vee S_\omega^n \longrightarrow \vee S_\lambda^n$$

の homotopy cofiber、 C_φ と考えることができる。ところで、

$$\begin{array}{ccccccc} \pi_n(\vee S_\omega^n) & \xrightarrow{\varphi_*} & \pi_n(\vee S_\lambda^n) & \longrightarrow & \pi_n(X^{(n+1)}) & \longrightarrow & 0 \\ \downarrow h & & \downarrow h & & \downarrow h & & \\ \tilde{H}_n(\vee S_\omega^n) & \xrightarrow{\varphi_*} & \tilde{H}_n(\vee S_\lambda^n) & \longrightarrow & \tilde{H}_n(X^{(n+1)}) & \longrightarrow & 0 \end{array}$$

の図式は可換であり、左二つの縦が Theorem 0.0.7 により同型である。また、

$$\begin{array}{ccccccc} \tilde{H}_n(\vee S_\omega^n) & \longrightarrow & \tilde{H}_n(M_\varphi) & \longrightarrow & \tilde{H}_n(C_\varphi) & \longrightarrow & \tilde{H}_{n-1}(\vee S_\omega^n) = 0 \\ \downarrow = & & \downarrow r_* \cong & & \downarrow = & & \\ \tilde{H}_n(\vee S_\omega^n) & \xrightarrow{\varphi_*} & \tilde{H}_n(\vee S_\lambda^n) & \longrightarrow & \tilde{H}_n(X^{(n+1)}) & \longrightarrow & 0 \end{array}$$

の可換図式で上列は cofibration があるため完全性定理により完全なので、下列も完全である。一方 π_* で考えていけば、 $M_\varphi, \vee S^n$ は共に $n-1$ 連結であるため、projection

$$p : (M_\varphi, \vee S_\omega^n) \longrightarrow (X^{(n+1)}, *)$$

は $2n-1$ 連結である。よって、

$$\begin{array}{ccccccc} \pi_n(\vee S_\omega^n) & \longrightarrow & \pi_n(M_\varphi) & \longrightarrow & \pi_n(M_\varphi, \vee S_\omega^n) & \longrightarrow & \pi_{n-1}(\vee S_\omega^n) = 0 \\ \downarrow = & & \downarrow r_* \cong & & \downarrow p_* \cong & & \\ \pi_n(\vee S_\omega^n) & \xrightarrow{\varphi_*} & \pi_n(\vee S_\lambda^n) & \longrightarrow & \pi_n(X^{(n+1)}) & \longrightarrow & 0 \end{array}$$

の可換図式で、上列は対の完全列であるから、下列も完全となる。よって元の、

$$\begin{array}{ccccccc} \pi_n(\vee S_\omega^n) & \xrightarrow{\varphi_*} & \pi_n(\vee S_\lambda^n) & \longrightarrow & \pi_n(X^{(n+1)}) & \longrightarrow & 0 \\ \downarrow h & & \downarrow h & & \downarrow h & & \\ \tilde{H}_n(\vee S_\omega^n) & \xrightarrow{\varphi_*} & \tilde{H}_n(\vee S_\lambda^n) & \longrightarrow & \tilde{H}_n(X^{(n+1)}) & \longrightarrow & 0 \end{array}$$

の図式において five lemma が用いられ、

$$h : \pi_n(X^{(n+1)}) \longrightarrow \tilde{H}_n(X^{(n+1)})$$

が同型になることが示された。